日本フランス語学会　ニューズレター　第32号　2024年6月1日

日本フランス語学会編集委員会発行

＜目 次＞

１．事務局より
２．前年度編集責任より
３．本年度編集責任より
４．例会予定
５．談話会予定
６．各地の研究会だより
７．海外情報
８．2023 年度収支決算報告
９．編集後記

１．事務局より

2024 年度より栗原唯（大阪大学）と高橋克欣（大阪大学）が事務局の運営を担当しております．事務局の住所およびメールアドレスは 2023 年度と同じです．

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8
大阪大学大学院人文学研究科
高橋克欣研究室内
日本フランス語学会事務局
belf-bureau@ml.office.osaka-u.ac.jp

◆会費

会費の徴収は，数年分をまとめてお振り込みになるよりも，『フランス語学研究』に同封の振り込み用紙を使って期日までに毎年一年度分をお振り込みいただくようにお願いいたします．お忙しい時期とは思いますが，学会の円滑な運営のために是非ともご協力をお願いいたします．なお 3 年以上会費の納入が滞っている場合は会員資格が停止され，『フランス語学研究』は送付されなくなりますのでご注意ください．

◆投稿規程

投稿方法の詳細については，『フランス語学研究』表紙裏の「投稿規程」及び巻末の「投稿原稿のジャンルについて」をご覧ください．原稿は 11 月末日必着で，事務局宛にメールでご投稿ください．その際「本文原稿ファイル」とは別に「表紙ファイル」を作成してお送りくださるようにお願いいたします.フォーマットは学会ホームページにある専用フォーマットをご利用ください．なお郵送や編集委員による持ち込みは受け付けられません.

◆機関誌バックナンバーのアーカイブ化について

2024 年 4 月現在，創刊号から 54 号までが J-Stage で公開されています.

https://www.jstage.jst.go.jp/browse/belf/-char/ja

刊行 3 年を経過した号から J-Stage にて順次無料公開しています．会員の皆様には，バックナンバーとしてご活用いただけましたら幸いです.

（栗原唯・高橋克欣）

２．前年度編集責任より

皆様のところに，学会誌第 58 号が届いた頃かと拝察いたします．論文等の各原稿執筆者，会員各位のご協力により無事刊行に至りました.

インターネットが普及し，学会の種々のやり取りは電話や郵便からメール，電子ファイル，遠隔会議へとすでに移行していて，編集責任者としてこれらに対応できるかどうか，これが一番不安だったのですが，何とか乗り切ることができて，安堵しております．前任の安齋有紀先生，前々任の芦野文武先生はじめ各編集委員の先生方におかれましては，厚いサポートをまことにありがとうございました.

大学院に入ったというだけで，まだ研究の右も左もわからず，授業で当時一番お世話になっていた故木下光一先生に勧められて，私はかなり受動的にこの学会に入会しました．しかし，例会やその後の懇親会で様々な先生方や年上の大学院生が実に気さくに声をかけてくださり，研究文献を教えていただいたり，他の研究者を紹介していただいたりしました．これらの関わりからどれだけ恩恵を得たか，はかりしれません．奇しくもちょうど自分の退職の年に，僅かな恩返しができたことを勝手ながら嬉しく思っています.

この１年間は学会にかなり密にかかわることになっ

たのですが，その中で少し気づいたことや考えてみたことを，以下まとめてみます.

コロナ禍で，学会も大きな影響を受けざるをえませんでした．具体的には，例会や編集委員会の対面開催ができなくなりました．しかし反面，これは思わぬメリットをもたらしました．移動の負担を伴わない遠隔形式が，例会参加者の増加に繋がったのです．遠隔参加が可能なハイフレックス方式での開催が現在ではメインになっていますが，トータルの参加者数は，コロナ以前の 1.5〜2 倍程度で維持されています.

どの学会も，研究発表や講演などの公的な側面に加えてインフォーマルな懇親会を設けています. これは，寛いだ雑談の場を，個人間の情報交換，今後のシンポジウム等の発案，大学院生や若手研究者への貴重な励ましの機会として機能させるためです．本学会でも，今後ぜひ定着させていくべきと思います.

本学会のみならず他の学会や国際学会等で活躍する大学院生や会員が増えてきて，頼もしい次第です．しかし，研究能力とその発信への熱意とは必ずしも相関関係になく，潜在的に優秀な人が埋もれたままになっているかもしれません．常に細かな目配りをして，このような若手を積極的に発掘し，発表や論文投稿に向けて背中を押してあげる必要があります．これに中堅やベテランの発表も加われば，学会誌の充実に繋げるべく例会の回数をもう少し増やすことは可能ではないでしょうか.

次号は，武本雅嗣先生が担当されます．編集委員や会員の皆様におかれましては，新編集責任者へのサポートをどうかよろしくお願いいたします．微力ながら私も，副編集責任者として武本先生を支えたいと思います.

（阿部宏）

３．本年度編集責任より

本年度の BELF 58 号の編集責任を務めることになりました武本雅嗣です. 57 号の編集において前任の阿部宏先生の見習いのようなかたちで少しお手伝いさせていただきましたが，その責任の重さを強く感じています．ただ，今度は阿部先生が副編集責任として助けてくださることになっていますので，たいへん心強いです.

コロナ禍以降，本学会でも編集会議・例会は遠隔またはハイフレックス方式で開催されるようになっていますが，私の本務校の山口大学は Webex とのみ法人契約をしていますので，個人的に Zoom とも契約しました．ですから，今年度の編集会議は Zoom を利用して行っていきます．編集委員の方々，ご協力のほどよろしくお願いいたします．編集責任としましては，次号も是非充実したものにしたいと思っています．会員の皆さま，どうぞ奮ってご投稿ください.

2010 年に編集委員になったときにもこのことはニューズレターに書きましたが，私は阪神淡路大震災の際本学会からたいへんありがたい援助をいただきました．当時何の貢献もしていない一会員の私にも手を差し伸べてくださったことに対して, 29 年が過ぎた今でも深く感謝しています．定年まであと 3 年弱となり，いろいろな点で衰えを感じるようになってきましたが，最後の力を振り絞って精一杯任務を果たす所存です．何卒よろしくお願いいたします.

（武本雅嗣）

４．例会予定

2024 年度例会は 4 月，6 月，9 月，12 月の 4 回開催されます．例会案内はホームページによるほか，メーリングリスト frenchling でも配信しています．例会は日本フランス語学会の会員以外の方でも自由に来聴することができます．入場も無料です．すべてハイフレックス形式またはオンライン形式での開催となりますので, 事前に参加申込が必要になることがございます. 例会案内をよく御覧ください．みなさまのご参加をお待ちしております.

発表については，日本フランス語学会の会員の方であれば，どなたでも発表することができます．特に事前審査はなく，申込順に発表が決まります．若手研究者からベテラン研究者までが集まり，研究交流のできるよい機会でもあります．研究成果を業績として公表したい，あるいは学会誌『フランス語学研究』への投稿を検討している方はどうぞ奮ってご参加ください.

発表のご希望やその他例会に関するお問い合わせ：

日本フランス語学会例会運営担当

reikai@list.waseda.jp

以下はニューズレター編集段階の 5 月 27 日現在の予定です．最新の予定は学会ホームページで確認してください．

第 346 回例会　2024 年 4 月 13 日(土) 15:00-18:00
会場：京都大学吉田南総合館南棟 334 演習室
開催形式：ハイフレックス
(1) 高久真由美（東京大学大学院）
「フランス語一人称小説における現在形の意義にまつわる事例研究—*le diable au corps* を題材として—」
(2) 井上大輔（上智大学大学院）
「言語の『逸脱』的使用と広告文」
司会：守田貴弘（京都大学）

第 347 回例会　2024 年 6 月 15 日(土) 15:00-18:00
会場：名古屋外国語大学名駅キャンパス MW07 教室
開催形式：ハイフレックス
(1) 谷澤まどか（Université de Sorbonne Nouvelle 博士課程）
「*Absolument*：unité à prédicat averbal partiel」
(2) 岸本聖子（愛知県立大学）・谷智子（関西外国語大学）
「公共掲示物の行為促進型表現に見られる語用論的ストラテジー：—「フッティング」(Goffman 1981) の観点からの日仏語対照分析—」
司会：伊藤達也（名古屋外国語大学）

第 348 回例会　2024 年 9 月 21 日(土) 15:00-18:00
会場：大阪大学豊中キャンパス
開催形式：ハイフレックス
(1) 高垣由美（関西学院大学）
「同格節を導入する où」
(2) 宮腰駿（東京大学大学院）
「副詞 heureusement の用法と特徴に関する一考察」
司会：高橋克欣（大阪大学）

第 349 回例会　2024 年 12 月 7 日(土) 15:00-18:00
会場：上智大学
開催形式：ハイフレックス
(1) 発表者未定
(2) 発表者未定
司会：Simon Tuchais（上智大学）

５．談話会予定

2024 年度談話会を以下の要領で開催します．今年度は「ナッジ理論」をテーマに 3 名のパネリストをお招きし，理論面から実践面にわたる講演と討論を企画しています．皆さま奮ってご参加ください．

日時：2024 年 11 月 2 日（土）13 時–16 時
形式：オンライン
テーマ:「ナッジ　—コミュニケーションの新たな形—」（仮）
パネリスト：
フランス・ドルヌ先生（青山学院大学）フランス語学
奥原剛先生（東京大学）医療コミュニケーション学
伊豆勇紀さん（宮城県庁）宮城県行動デザインチーム（MyBiT）設立者

参加方法, 講演タイトルなど詳細が決まりましたら, 学会 HP, frenchling でご案内します．

（世話人：栗原唯・山本大地）

６．各地の研究会だより

◆関西フランス語研究会

関西の大学院生とフランス語教員が中心になって研究会を開いています．会場は主に関西大学梅田キャンパスです．昨年度の発表は以下の通りです．

2023 年 9 月 16 日
梶原久梨子「再帰構文と非再帰構文における前置詞の親和性について」
2023 年 11 月 25 日
曽我祐典「複合過去形で表す事態のタイプ」

開催回数はひかえめですが，今後はオンライン開催も含めて継続してゆく所存です．

この研究会では，論文や学会発表をひかえる人がその準備のために発表したり，論文を完成したり学会発表を終えた人がその内容を紹介したりしています．形式にこだわらず，気軽に意見・情報の交換ができる集まりです．また，新刊書や論文の紹介，国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども歓迎します．発表を希望される方は，以下のアドレスまで気軽にご連絡ください．

大久保朝憲：tomonori@kansai-u.ac.jp
高橋克欣：k_takahashi@lang.osaka-u.ac.jp

（大久保朝憲）

◆東京フランス語学研究会

東京フランス語学研究会は，大学院生など，若手を中心としたフランス語学研究者の気楽な研究発表，議論，交流の場です．原則としてオンラインで開催しますが，ゲストスピーカーを招いたり，他のプロジェクトと共催するなど，特段の事情がある場合には対面で開催します．

発表資格，会費などの制度は設けませんので，関心のあるかたはどなたでも自由に参会，発表していただけます．発表は，フランス語（学）に関係することであれば，どのようなテーマでもかまいません．また，完成された内容である必要もありません．学会発表の前段階にあたるような習作的な発表や，先行研究にたいする論評といった形の発表も歓迎します．昨年度のニューズレターで既報分以降は，つぎのような発表がありました．

第 58 回研究会

日時：2023 年 11 月 4 日(土) 14 時から 17 時

会場：千葉工業大学津田沼キャンパス 7 号館 7410 教室

(1) 発表者：宮腰駿（筑波大学大学院）

題目：Considérations sur les différences entre les adverbes en *-ment* et les locutions introduites par la préposition *en*

司会：渡邊淳也（東京大学）

(2) 発表者：Aude Grezka (CNRS / Université Paris XIII)・木島愛（千葉工業大学）・Alexis Ladreyt（北海道大学）

題目：Phraséologismes pragmatiques de la conversation quotidienne：enjeux théoriques et méthodologiques

司会：塩田明子（上智大学非常勤）

第 59 回研究会

日時：2024 年 4 月 20 日(土) 14 時から 17 時

実施方法：オンライン

(1) 発表者：小金井菜々葉（武蔵大学学生）

題目：前置詞句 à l'avance, d'avance, en avance, par avance に関する先行研究の検討

司会：塩田明子（上智大学非常勤）

(2) 発表者：宮腰駿（東京大学大学院）

題目：Heureusement que... に関する一考察

司会：渡邊淳也（東京大学）

今年度，これ以降の予定は以下のようになっております．

第 60 回研究会

日時：2024 年 6 月 22 日(土) 14 時から 17 時

実施方法：オンライン

(1) 発表者：喜田浩平（慶應義塾大学）

題目：思考のフィギュールにおける「文法」— 直言（Licentia)・逡巡（Dubitatio)・呪詛（Imprecatio)

(2) 発表者：未定

第 61 回研究会

日時：2024 年 11 月 2 日(土) 14 時から 17 時

実施方法：オンライン

(1) 発表者：未定

(2) 発表者：未定

第 62 回研究会

日時：未定（2025 年 2～3 月を想定）

発表を希望なさるかたは，下記ホームページの「お問い合わせ」の項目から世話人あてにご連絡ください．最新の予定については，ホームページの「今年度の研究会」の項目でご確認ください．

東京フランス語学研究会ホームページ：

http://lftky.jimdo.com/

（渡邊淳也・塩田明子）

7．海外情報

今回は，現在ご留学中かあるいは近年ご留学を経験された大学院生および学部卒業生の 3 名の方にご寄稿をお願いいたしました．それぞれに特色ある大変貴重な興味深い経験談をいただきましたので，以下にご紹介いたします．

◆ソルボンヌ・ヌーヴェル（パリ第三）大学

私は 2024 年 4 月現在，JASSO の海外大学院学位取得型奨学金（以下，JASSO 奨学金）とフランス政府奨学金（以下 BGF）の二つの博士課程向け留学支援制度

を利用し，パリ第三大学の博士課程一年目に在籍しています．学部時代を東北大学のフランス語学フランス文学研究室ですごし，その後，フランス政府給費留学制度に支援していただきパリ第三大学の ILPGA（Institut de Linguistique et Phonétique Générales et Appliquées）で修士課程を修了しました．その後，上述の 2 種類の奨学金をいただいて同大学の言語学を専門とする École Doctorale (ED) 622 に入学しました．本稿では，修士（ILPGA）・博士（ED622）課程の特色，私が関心を持つコートジボワールのフランス語，奨学金制度の 3 点を紹介します．

1. パリ第三大学の ILPGA と ED622 について

私が修士を終えた ILPGA は元々音声学や音韻論に非常に強い研究ラボとして 1911 年にその前身がスタートしました．現在は学部・修士・博士課程に門戸が開かれており，修士課程では 1）言語自動処理 TAL (Traitement Automatique des Langues), 2）言語科学 Sciences du Langage，3）音韻・音声学 Parcours Phonétique Phonologique の三つの専攻に分かれています．さらに 2) Sciences du Langage 専攻では，2.1）言語記述・分類学，2.2）談話・コーパス分析，2.3）社会言語学，2.4）言語習得の四つの専門が用意されており，言語に関わる非常に多くの研究分野をカバーすることができます．授業では，テストや発表，レポート作成など総合的に成績評価を受けます. それと並行し，一年次には mini-mémoire という 30-50 ページほどの修士予備論文，二年次には 80 ページほどの修士論文を提出する必要があります．授業と自身の研究を同時にこなすのは非常に大変ですが，その分やりがいがあり，フランス語能力が格段に上がりました．

現在在籍している ED622 はパリ第三大学の ILPGA と Paris Cité 大学が合同で形成する博士課程で, A）談話分析 CLESTHIA（ニューズレター2020 年号の栗原さんの記事も参考），B）言語教授法 DILTEC，C）言語理論 HTL，D）言語人類学 LACITO，E）言語認知・自動処理 LaTTiCe，F）音韻音声論 LPP の六つのラボがあり，研究者と博士課程の学生が在籍しています．私は D）LACITO に所属し，フランスの地方言語 occitan の言語復興運動 revitalisation linguistique に関し社会言語学研究を行う James COSTA 氏と，西アフリカのマリの Bwa 族のことわざについて言語人類学研究を行う Cécile LEGUY 氏の共同指導を受け，研究を行っています．

また LACITO はフランス国立研究機関 CNRS にも所属しています. そのため私自身「Sorbonne Nouvelle-ED622 所属学生」かつ「CNRS-LACITO 所属の研究者」として，学会や研究に必須のフィールドワークに出発する際は, 大学側 ED622 と CNRS-LACITO 側の二つの機関に対し研究予算などを申請することができます．

博士課程在籍中は 150 時間のセミナーや研究会に参加する必要があり，自身の研究に関連があれば所属機関に縛られることなく，世界中の研究機関の対面・オンラインセミナー・研究会に参加し学びを深めることができます．例えば 2023-2024 年度参加している EHESS の「Actualité de la recherche en anthropologie sociale en Afrique」では，私自身の研究領域でもあるアフリカをフィールドとする人類学者を招待し，学生・研究者を含む参加者間での議論を通じ，その分野の最新の研究動向を共有しています．またセミナーの他にも，指導教官と他の博士課程の学生と一緒に定期的に研究の進捗報告を行っています．

2. コートジボワールフランス語スラング「ヌシ」の研究

私はコートジボワールのフランス語スラング「ヌシ」に興味をもち東北大学の学部時代から一貫して研究を続けてきました．修士時代にはアフリカ出身移民が多く住むパリ 18 区の Château Rouge という地区のコートジボワール食料雑貨店 épicerie で 3 ヶ月のフィールドワークを行い，そこから修士論文を執筆しました．

博士課程では，本来ストリートで使われていたスラング「ヌシ」がコートジボワールの学校でもより頻繁に使われつつある状況に関心を持ち，アビジャンの中等教育機関を中心に 2024 年夏から一年程度のフィールドワークを開始できるよう 2024 年 4 月現在準備を進めています．

3. 奨学金について

このようなフランス滞在は，JASSO 奨学金と BGF の支援によって成り立っています．前者からは月額支

援金（148,000 円）の給付を受けています．後者からは（滞在費の併給が認められていないため）BGF 奨学生としての身分のみが保証され，住居を見つけるサポート，学費免除等の大学関連費用支援，ENS の聴講制度の利用などを通じ，日々の生活におけるサポートを受けています（併給でない場合，生活費の支給あり）．

フランスで博士課程をするにあたり，よく二つの戦略があると言われます．一つは奨学金を持っており支給期間内（多くが 3 年）に終わらせるよう目指しポスドク期間に教育・指導経験を積む戦略と，もう一つが奨学金の有無にかかわらず博士課程のうちから教育・指導経験を積みつつ並行して研究を行うことで 4〜5 年程度かけて博士課程を終える戦略です．どちらもメリット・デメリットがありますが，日本人がフランスで博士課程を行うにあたり，よほど金銭的な余裕がない場合，奨学金を利用し期間内に修了できるよう目指すことは必須だと感じます．現に私の周りの日本人，フランス人，その他国籍の博士課程の学生の多くは何かしらの奨学金を利用して研究を行っています．とりわけ日本からの博士課程の学生の多くは，おそらく日本で修士を終えたあるいは日本で博士課程に数年在学しており cotutelle などの制度を使いくる人が多いように感じます．

ただ奨学金を獲得することができなくとも，大学側が修士・博士課程の学生をいわばアルバイトの形で採用する機会があるため，そこから生活費の一部を補填することができます．大学附属図書館や試験監督など大学内部でアルバイトを行うことは非常に賢い選択だと思います．

パリ第三大学での研究事情，ヨーロッパからアフリカへの広がり，奨学金情報などについて紹介した本稿が研究者志望の大学院生の皆さんに少しでも将来役に立てば非常に嬉しい次第です．

（武田秀祐：東北大学大学院文学研究科
フランス文学修士課程修了）

◆パリ東クレテイユ・パリ第 12 大学

私は 2019 年 9 月から，ロータリー財団 2680 地区の地区補助金奨学金を得て，パリ東クレテイユ・パリ第 12 大学（Université Paris-Est Créteil Val de Marne，通称 UPEC）の Master2 に留学をしました．UPEC はメトロ 8 番線の Créteil-Université という駅が最寄りで，駅の改札を出るとすぐにキャンパスが広がっています．

私が在籍していた Lettres, Langues et Sciences Humaines（LLSH）研究科には，文学や言語，歴史などを学ぶ学生がおり，各専攻に分かれています．キャンパス内に留学生のための語学教育機関 DELCIFE (そこで Master に入るための語学力を身につける留学生が多いです)があるものの，正規課程として留学している人は当時さほど多くなく，LLSH の Master の授業でよく顔を合わせるのは 30 人程度でしたが，私を含め留学生は 4 人（日本，中国，イタリア，チェコ）で，アジアからの留学生は少ない印象でした．学内全体でもやはり留学生は全体で 1 割ほどとのことです．

私は慶應義塾大学の芦野文武先生のご紹介で，発話言語学（TOPE）の英語学がご専門の Lucie Gournay 先生に受け入れ教員になっていただきました．Gournay 先生の取り計らいで，フランス語を専門とする先生も共同指導者になっていた方が私にとっては良いだろうと，discours socio-politiques の研究をなさっている Émilie Née 先生にも指導教員になっていただきました．Née 先生のご所属は Lettres でしたので，形式上私は文学専攻になり，自身の専門である言語学の授業のほか，近現代文学や寓話，ベトナム文学など，文学の授業に出て単位を取得する必要がありました．大学のライセンスで使用できるコーパスがたくさんあったので，コーパスにお詳しい Née 先生からは，Frantext をはじめ，雑誌等のメディアにおけるフランス語を収録した Factiva などの活用方法を教えていただきました．Gournay 先生も Née 先生もとても面倒見が良く，私が質問のメールを送ると，いつも「明日はオフィス/BN にいるからいらっしゃい．一緒に考えましょう」とすぐにお返事をくださいました．お二人のおかげでフランス滞在中の学びが深まったことについて，非常に感謝しています．

UPEC には，言語や文学，文化をテーマとする研究グループ IMAGER（L'institut des Mondes Anglophone, Germanique et Roman の略）があります．私はその中の IDEAL (Interactions Discursives et Analyse Linguistique の略)に所属しました．英仏対照研究をなさっている Françoise Doro-Mégy 先生とド

イツ語学がご専門の Thérèse Robin 先生が主体となり，月に 1 回金曜日の午後に研究会が催されます．参加者は教員や院生を合わせて 10 名ほどです．フランス語や英語のほか，ドイツ語，スペイン語など，さまざまな言語がテーマであり，活発な議論がされていました．

2020 年 3 月中旬，コロナがフランスで深刻化しはじめ，どうやらロックダウンされるらしいという噂を聞き，家族の勧めもあり翌日の飛行機で帰国することにしました．収束したらまたすぐにパリに戻れるだろうという期待も虚しく，当初 1〜2 年を想定していた留学の滞在はわずか半年になってしまいました．私は兵庫県の実家で，オンライン授業を通し残りの授業の単位取得と mémoire の執筆に取り組むことになりました．コロナやオンライン授業対応という大変な混乱であったと思いますが，お二人の指導教授は私の研究の進捗を案じ，親身になってメールで指導をしてくださいました．そのおかげで，9 月に continuer à/de Inf. に関する mémoire（これを再考したものが，研究ノート「continuer à Inf. と de Inf.の競合」として『フランス語学研究』第 56 号に掲載されています）を提出することができました．提出後は Skype で soutenanece を受け，11 月ごろに郵便で送られてきた学位証明書を受け取りました．

その後私は大阪大学大学院博士後期課程に進学し，前置詞 à の統一的理解を目指し研究を行っています．博士論文の執筆を進める中で行き詰まり，思い切って Gournay 先生に連絡をとったところ，「ぜひいらっしゃい」というお誘いをいただきました．そうして 2024 年 2 月に IDEAL でこれまでの研究成果と博論の構想の発表をさせていただきました．留学中は IDEAL で発表することを目標にしていたので，4 年越しに叶えることができました．特に Lionel Dufaye 先生にはたくさんの助言をいただき，博論完成に向けたくさんのアイデアをいただきました．この研究会にはハイブリットで参加することができるため，今後も参加し，知識を深めるとともに研究の展望を広げていきたいと思います．

（梶原久梨子：大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程）

◆ペンシルバニア州立大学

アメリカへ留学に行く，といえば英語を学びに行くことだ，と考えるのが一般的だと思われます．あるいは，アメリカ大陸でフランス語を学ぶのであればカナダへ行くのが定石です．実際，周知のようにケベック州ではフランス語が公用語になっています．しかし，アメリカで学べるのは英語だけではありません．2023 年春のペンシルバニア州立大学への留学を通して，私は「アメリカでフランス語を学ぶ」という選択肢があることを発見しました．それどころか，アメリカの大学は魅力にあふれた豊かなフランス語学習環境に恵まれています．以下，アメリカでの「フランス語体験」に関する報告です．

ペンシルバニア州立大学は，東海岸の奥地にあるステートカレッジという街に位置する大学です．ニューヨークからバスで 5 時間ほどかかる，といえば少しはアメリカ大陸の規模が想像しやすくなるでしょうか．大学のある街そのものはあまり大きくはありませんが，キャンパスの大きさたるや，我々の想像をはるかに超えたものがあります．なんと，キャンパスのなかに世界で四番目に大きなスタジアムがすっぽりと収まっているのです．この大学は私が在籍していた東北大学と交換留学の提携を結んでおり，私もこの制度を利用して留学しました．東北大での専攻は英文学でしたが，学部一年の頃からフランス語を学んでいた関係でフランス語の授業を取ることにしました．これは日本の大学でいうところの第二外国語の授業に相当します．私はいわゆる「二外」のフランス語のなかでも最もレベルの高い French 3 という授業を選択しました．

この授業は作文や会話などを通してフランス語を実践的に使う力を身に着けるというものでした．毎回課題が多く，アメリカ人の同級生たちも苦労しているようでした．驚いたことに，担当の先生はテイラー先生という博士課程の大学院生でした．アメリカでは，大学院生が TA として授業を受け持つ，という制度があります．授業を受け持つことを条件に大学院生が大学側から給料を受け取る，という仕組みになっているとのことです．働きながら学ぶ，というのが仏文に限らずアメリカの大学院の特徴です．ちなみに，大学院生にはオフィスも与えられます．授業後にテイラー先生のオフィスを訪ねて，フランス語で会話をするような

一幕もありました．授業を通してテイラー先生と親しくなり，また彼女を通してその同僚の大学院生やフランス語関係の先生方ともかかわる機会がありました．使う言葉は，もちろんフランス語です．こうした交流を通してアメリカの仏文の様子を知ることになります．

これまで便宜的に「仏文」といういかにも日本的な表現を当ててきましたが，ペンシルバニア州立大学の「仏文」は日本のそれとは様相を異にしています．正式名称を French and Francophone Studies といい，伝統的なフランス文学やフランス語学の研究はもちろんですが，それ以上に分野横断的な研究が盛んです．なかでも，ジェンダー研究や，ポストコロニアル研究など，アクチュアルな問題を扱う隣接分野と絡めた研究をしている先生方や院生が大半を占めているとのことです．これは，コロナ禍以降特に社会問題への関心が高まっているアメリカの社会的背景を反映してのことです．ちなみにテイラー先生は 18 世紀啓蒙思想をヴィーガニズムという視点から分析した博士論文を執筆中とのことでした．

テイラー先生の同僚でガーナ出身のクワジ先生とも親交を深めました．彼はテイラー先生の授業と同じ時間に隣の教室で別の授業を受け持っており，私と同じ寮に住んでいた韓国人の学生もそれに参加していました．こうしたことから，彼と知り合うようになり，交流は今でも続いています．クワジ先生は授業などでアフリカ文学のテキストを扱っており，ディアスポラ文学などへの関心も高めているとのことです．このように，大学院生や研究者のアイデンティティーが研究テーマと結びつく，というケースもまれではありません．こうしたところにも「アメリカらしさ」が現れているのではないでしょうか．「アメリカらしさ」は「仏文」という場に集う人々が背負っている背景にも反映されています．クワジ先生はガーナの出身で，英語が話されている環境で生まれ育ちました．エンジニアとしてカメルーンで働いていたときにフランス語の面白さに目覚め，大学へ行き直してフランス語を学び，高校でフランス語教師をしてからアメリカへ来たとのことです．他にもフランス出身の大学院生も多く在籍しており，なかには中国から来ている人もいました．クワジ先生の指導教員は，コモロ連合出身のアフリカ文学研究者です．恥ずかしながら，私はそのときコモロという国名を初めて耳にしました．この国は，マダガスカルより南に位置する島嶼国家です．多様なバックグラウンドをもった研究者や学生がフランス語（それから英語）というリンガフランカを通して結び合わされる，それがペンシルバニアの「仏文」という場なのです．ちなみに，日本からの大学院生は今のところ在籍していません．ペンシルバニア州立大学は有名な大学ではありますが，フランス語だけでなく他の学科についても日本人の数はごく限られています．もし日本というバックグラウンドを活かしてこうした場でフランス文学/語学研究を行うとしたら，いったいどのようなテーマやアプローチが考えられるだろうか？そうした疑問が，脳裏をよぎりました．

さらに，ペンシルバニア州立大学のフランス語学科にはフランスとの間に太いパイプがあります．私が留学したのは 2023 年の春でしたが，翌年にパリ・オリンピック/パラリンピックを控えていたため，フランス語を学ぶ大学院生や学部生を対象にパリでのボランティア活動への参加者を募っていました．この情報は授業中にテイラー先生を通して得たものです．私の交換留学は 2023 年の春学期のみでしたので，もちろん参加することはかないませんでしたが，アメリカでフランス語を学ぶとこういった機会もあるのか，と新鮮な気持ちになるとともに，自分もいつかこのような機会を得たいものだ，と思ったのを覚えています．

このほか，ペンシルバニア州立大はフランスのストラスブール大学と提携を結んでおり，そこの英語学科で英語を教えながらフランス留学をするという制度も用意されているようです．テイラー先生の授業や，彼女を通して出会った人たちとの交流は，2023 年春の留学のなかでも特に記憶に残っています．この交換留学を通して，アメリカでフランス語を学ぶ，という選択肢があることに気づかされ，目の覚めるような思いがしました．将来への展望が開けた瞬間でした．

（佐藤勇人：東北大学文学部英文学専修卒業）

８．２０２３年度収支決算報告*

収入の部	（単位　円）
会費	656,000
機関誌売上金	91,000
広告収入	40,000
預金利息	17
小計	787,017
前年度繰越金	3,235,787
計	4,022,804

支出の部	
BELF57 号印刷代金	499,158
BELF58 号編集実費	0
発送費・通信費	84,765
特別発表(講演)謝金・交通費	90,000
事務消耗品費	13,087
振込手数料	22,904
ホームページ管理費	7,731
言語学系学会連合年会費	10,000
小計	727,645
次年度繰越金	3,295,159
計	4,022,804

次年度繰越金の内訳は以下のとおり

銀行預金	(三井住友銀行普通預金)	31,768
	(三井住友銀行定期預金)	2,008,525
郵便貯金	(普通)	38,884
	(振替)	1,215,500
現金		482
計		3,295,159

* 2024 年 3 月 31 日現在の収支決算報告．6 月 2 日に開催された編集委員会で会計報告と監査報告がなされ，審議のうえ承認の手続きがとられた．

〒560-0043
大阪府豊中市待兼山町 1-8
大阪大学大学院人文学研究科
高橋克欣研究室内
日本フランス語学会

９．編集後記

今年もニューズレターを皆様に無事お届けできる運びとなりました．今回は「海外情報」欄に，現在大学院生および学部卒業生の 3 名の方から，若い方たちの視点に立った大変な新鮮で興味深いご留学の経験談をいただきました．日本フランス語学会では若手研究者の発掘ということが喫緊の課題となっておりますが，ニューズレターの新たな存在意義として，その克服のための一助となるという役割を見出すことができたように感じられ，密かな感激を覚えた次第です．これからもさらなる付加価値を模索しつつ，活力ある充実した紙面を目指したいと思っております．

末筆ながら，原稿をお寄せいただいた皆様ならびに関係者の皆様，そして上記「海外情報」欄の寄稿者をご紹介いただいた東北大学の阿部宏先生と大阪大学の高橋克欣先生に，この場をお借りして心よりお礼申し上げます．

（奥田智樹）